九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

西芳寺の庭

小牧, 健夫

https://doi.org/10.15017/2556526

出版情報：文學研究. 35, pp.137-146, 1946-03-30. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

西芳寺の庭

小牧健夫

梅雨の晴れ間に私は嵯峨に行つた序でを再び洛西松尾に在る西芳寺（苔寺）を訪ひ、有名なその庭園を一廻りして來た。この場合言葉どほり一廻りしないではゐられなかつた。なぜなら、この林泉は吾國の廻遊式庭園の典型的な最初のものといはれ、園の景觀は逕を行く一歩一歩に變化し、特定の地點からのみ眺望するやうに築造されてゐないからである。

つづいた雨の後であるから苔が美しい、と住持は言つてゐたが、苔の色はこの前秋の日に來たときほど私の眼を驚かさなかつた。一つには二度目の事で印象が潑剌としないのかも知れないが、秋になつて樹々の葉が色づくと、その多樣の色彩が樹蔭に映發し、蘚苔の錦綺を一層引立たせるのであらう。

吾國造庭史上の巨擘夢窓國師によつて構築されたこの庭園は、細別すれば四十種にも近いといはれる苔の美しさによつてのみ人の眼を惹くのでなく、泉石の趣致がいかにもすぐれてゐるので、吾國名園の一つと呼ばれて今も來觀の客が絶えないのである。

廻遊式庭園がいはゆる眺望式庭園に比して複雜な構造を有つことはもとよりである。前者は後者のやうに一方から、もしくは二三の點から眺める風景でなく、苑路を歩みながら見てゆく風景の效果を意圖し、しかも庭園全

體が一の作因（モティーフ）に從つて構成されなければならないからである。即ち動く風景として、多中心的な構圖として複雜な樣相を帶びてくることは自然である。

○

西芳寺の庭は廻遊式庭園の典型的なものであると同時に、禪院式庭園の代表的なものと見なされ、上部と下部の二つに分れ、西方洪隱山と呼ばれる丘腹に上部の庭園があつて、枯山水の石組を構へ、下部は黃金池といふ心字池を中心として、池泉廻遊の苑を成し、禪院式庭園のいはゆる二段構への樣式を完全に實現して、日本の庭としては最も複雜性を具へたものの一つといはれる。單に池泉の部分だけについて見ても、池の汀線の曲折、大小の島々の布置、庭樹の植栽の多種等、頗る變化に富んでゐて、豐麗といへばいへるやうな印象を受けとる。昔はこゝに大櫻樹があり、『夢窓國師年譜』には「堂前舊有大櫻花樹春時花數稠密殊妙爲洛陽奇觀也」と誌され、『陰涼軒日錄』にも、往時春花秋葉の美によつて遊覽の名所となつてゐた盛觀が敍せられてゐるさうである。京洛西方の遊苑として華かな存在であつたことが想像される。今日では規模も狹小となり、庭樹も貧弱となつたが、なほ全體の原形をとゞめてゐると傳へられ、往昔の華麗をしのぶことができる。

數年前の秋夕、私が初めてこの苑を見たとき、單に十・五個の石のみを以て築かれた「虎の兒渡し」とよばれるかの龍安寺の石庭をふと想起し、拙い一詩を草したことがあつた。※この林苑の絢爛とかの石庭の枯寂とを對比し、そのいづれにも日本造庭の精粹を見て、この兩者に即して日本の藝術史をつらぬく二つの流を思浮べたのであつた。

もとよりこの想念はとりとめのない詩的幻想として私の想像に播曳したにとゞまり、その後にもこの問題を追尋して發展せしめる暇を有たなかつたけれども、今度重

ねてこの庭に來て、またこの事を想出し、さらにこれに誘はれて種々の隨想がきれぎれに心に浮んできた。

○

私は茶室湘南亭の在るところに立つて西に向つて全苑を一望した。そこから眺められる、洪隱山を背景にとり入れた林泉のたたずまひは豐かな景致を私の前に展げてゐた。第一そこに見られる木立も松杉椎樅などの大樹が枝を交はして鬱蒼として茂り合ひ、池の或ところは長汀になぞらへ、或ところは曲浦をかたどり、點在する小島もそれぞれ風情を異にしてゐる。汀に沿ふ苑路は、或は深山の奥に通ふ幽徑の趣を見せ、或は郊野を横ぎる草しげき小道の姿を示してゐる。その上處々の石組みは趣向を凝らして巧みに變化を施してあるから、精細に觀察すればするほど複雜多様の味ひを感受する。それゆゑ龍安寺石庭の簡淨に較べて對蹠的な様式の一範例を見る思ひもするのである。

しかし吾々が石組みのみによつて構成された枯山水との對照によつて喚起されるこの庭の華麗とか絢爛の感じは、歐米人または支那人にも通用する印象であらうか。恐らく彼らは華麗絢爛の感じはおろか、吾々の見るこの庭の複雜多様性すら味得しないで、むしろ單調またはあまりに素朴の印象を受けとるのではないかと思はれる。あらゆる色の花卉を植栽して、色彩の綾錦によつて人を魅了しようとするフランス式庭園の華美を思ひ、奇岩怪石、また異常に巨大なもの、けばけばしい色調によつて感覺を刺戟しようとする支那式庭園の一傾向を考へれば、彼らの多くが日本の庭に單調寂寞を感じることはむしろ自然であらう。それは懶い、陰鬱な單調ではないにしても、彼らの趣味傾向の大體からいつて、寂しい單純さをそこに見出すに相違ない。彼らが日本の庭を見て先づ際立つて感ずるのはこの寂しさ、物足りなさであらう。そのために彼らのうちには日本の庭の様式にたいして不滿

足の情を表明するものもあれば、或は却てこの點に日本庭園の特色を見て珍重するものもあるのである。（ブルノー・タウトは桂離宮の建物と庭苑に、あらゆる日本的なものゝ基調をなす簡素の美を認め、「永遠なるもの」と稱してゐる。）

日本の庭の植栽は多く常綠樹が主となつてゐる。もとより春花秋葉の美觀もとり入れることを怠つてはゐないけれども、色の變化多彩といふことよりも、むしろ線の表現を主とする設計は、歐米及び支那の庭苑に比して日本の庭に色彩の單調質朴の印象を與へるのである。この事は土佐光起の畫論『本朝畫法大傳』の『畫論秘訣』の條に「それ畫の要は輕の一字にとゞまるのみ。たとへば眞の極彩色なりとも、輕の意を忘るべからず」といひ、「すべて畫をかくに墨繪ばかりによらず極彩色なりとも、大分あつさりと書くべし」といひ、また『彩色』の條に「彩色は淺きを佳とす、是輕也……彩色深ければ賤しくして死す」といふをはじめとして、本朝畫論の多くが、濃厚よりも淡泊を愛するわが民族の趣味感情に立脚して、簡素淡泊を高唱してゐることに照應するものである。※※（日本造庭史上廻遊式庭園が發達した時期に至つて造庭の手法が自然の繪畫的表現に接近し、自然を繪畫的に寫すことを意圖するやうになつたと言はれてゐるのである。）

一方また、支那庭園の特色は調和よりも對照を尙び、これに反して日本庭園は何よりも全體の調和を第一義とするといふ說がある（例へば岡崎文彬氏の『日本庭園』。）これについては多くの例證、精しい吟味を要するとしても、大たいの傾向を言ふものとしては、妥當の見解であるやうに考へられる。さうして調和を至上とするこの造園精神は日本の庭園に多樣複雜といふことよりも、むしろ單純、平明、簡淨といふやうな性格を與へるに適したものであること とは說明を要しないであらう。

私は近頃伊東忠太博士の『法隆寺』を讀み、法隆寺の建築が百濟式七堂伽藍の一種でありながら、外來の意匠の模倣ではなく、日本に於てりつぱに創作されたものであり、その意匠の精神には日本固有の傳統が基礎となつてゐることを說き、建築の外觀が淸秀であり、構造が簡明で無駄がなく、いはゆる「純眞な構造」であることを讃美し、細部の手法や裝飾もよく調和し、一見極めて單純なやうでその實細心な注意が行き亘つて寸分の遺漏のないことに驚嘆し、細部も裝飾も支那から傳來したものではあつても、日本の精神を以て處理してゐるので、支那風の濃厚な趣味は少しも現はれない、一言でいへば簡素淡泊であるとし、且つ材料は構造に必要なものばかりで、一も構造を離れた純裝飾的なものはないと手法の簡淨な點を力說し、要するに日本古來の建築の簡潔、淸淨、淡泊、質實の諸傾向が法隆寺の建築に見事に實現されてゐることを闡明してゐる所論に興味を感じた。あのやうに外觀が複雜多樣で七堂伽藍の華美をつくしてゐるごとく見える法隆寺の建築も、伊勢神宮の建築の簡淨な樣式と同樣に、十分に日本の藝術の特色を發揮してゐるといふのである。この事は建築と親密の關係にある日本造庭の考察にとつても有力な參考材料を提供するものではないであらうか。

○

さらに吾國造庭史を概觀するのに、鎌倉時代に至つて禪の趣味が生活の各層面に浸透するやうになつてから、從來行はれてゐたいはゆる寢殿式庭園は廢れて、廻遊式庭園や石庭が興つた。殊に禪僧夢窓疎石が林泉の築造に心を寄せ、西芳寺、鎌倉の瑞泉寺のごとき名園を築き、また西芳寺を模して造つた慈照寺（銀閣寺）の庭園が洗練された廻遊式庭園の範例を示すに及んで、この樣式は造庭界を風靡する狀態となつた。

もともとかやうに禪家によつて創始され、禪趣味を根

基としたこの庭苑の様式が、禪精神の核心をなす枯淡、閑寂、簡淨を愛するエートスと相反する方向を指す筈はなかつた。一見して受ける複雜多彩の印象は、枯山水のごとき簡素を極めた純象徴的な庭園との對比に於てこそ感ぜられるものの、上記の法隆寺建築についていはれる言葉はそのままここにも當てはまるのである。即ち一見甚だ複雜多様に思はれ、細部にまで數寄を凝らしてゐるところの見えるこの庭も、結局日本の藝術一般の特色である簡淨淡泊の精神が根本的に主調となつてゐることは爭はれないのである。

曩の日ここを訪うてふと描いた秋夕夢の後を承けて、感想はそれからそれへと窮まるところを知らないが、つひに實り多き發展を遂げることなく、同じところを廻遊式に廻るばかりで、極めて平凡なところに歸着することになつた。しかし私にとつてはなほ殘された問題が存するのである。

○

禪の精神の普及と同時に茶の趣味が上層の文化生活に浸潤してきたことは周ねく知られるとほりであるが、これに伴つて茶室、茶庭の築造が發達した。もとよりそれは茶道の神髄である「侘び」の精神を基調としたものである以上、簡素をむねとしてゐることは當然である。たとへば利久老後の作と傳へられて今ものこつてゐる山崎の妙喜庵はわづか三疊の室を二つにしきつて一疊の水屋をしつらへてゐるやうな質素を極めたもので、露地もまたこれに應じてこの上もなく簡樸である。※※※

しかるに、侘びの精神に立脚した茶室茶庭の造築が流行した安土桃山時代に、一方大書院の建築が盛に行はれ、これに伴つて書院式庭園の擡頭を見るに至つた。これは茶庭の構造が枯淡閑寂を志向するに引かへて、豪放、濶達、華麗の趣味を發揮してゐる。この現象は單に信長、秀吉の個人的氣象にのみ原因を歸することのできない時代精神としての歴史的意義が認められなければならない

であらう。

しかし今この際私にとつて問題となる點は、茶禪の趣味が普遍化したこの時代になつて、一方書院庭のやうな華麗の樣式と他方茶庭の簡素な樣式とが、並んで發達したといふ事實である。ところで、この兩つの對照的な樣式傾向の間には何ら內面的關係は存しないのであらうか。華麗といつても、浮誇、纖弱、巧緻に走ることなく、脫俗、洒脫、剛健の趣を帶びたこの期の藝術樣式に自由闊達を尙ぶ茶道禪味に通ふものが認められ、この兩方に共通する文化的基盤が考へられないであらうか。すでに室町時代に興つた座敷繪は、「華麗莊嚴」とも評せられるやうな（薩涼軒日錄）樣式として、豪華絢爛な桃山時代樣式の先驅をなすものとも言はれてゐるが、この裝飾藝術は禪僧の住居建築に隨伴して發生したといふ事實から延いて、禪家の生活環境には、主調である枯淡性の外に、華麗を愛する傾向も著るしく現れてゐることを指摘する者もある。（谷信一氏「室町時代美術史論」）。視圈をさらに擴大してこれを日本の藝術一般に及ぼし、一見對蹠的なこの兩つの傾向の關係を藝術史的考察對象とすることはできないであらうか。この考察は禪と日本文化との關係といふ問題にとつて有意義であるばかりでなく、また日本藝術の樣式史の諸問題にとつても、生產的な役割をつとめるであらう。

前に、日本の藝術にはたとへ複雜の美、華麗の趣をいはれる場合も、他國の藝術と比すれば、なほそこに日本的な美の根本特色である簡素性を否定することができないことを見たのであるが、またこれと逆に、茶禪の眞髓が日本的な枯淡、淸寂といふやうな性質を具へてゐるといつても、それは決して枯瘦でもなく、寂寞でもなく、內に冴えて深い含蓄を宿し、豐かな生命を湛へて生動してゐることが見逃されないのを考へなければならない。この會得の上にこそ前記の二つの流れの對照も成立つと

思ふのである。

（しかし、一たい或は單純といひ、或は複雜といひ、簡素といひ、多彩といふことがはたしていかなる意味を有つてゐるのであらうか。吾々にとつて複雜を極めるものが彼等の眼には至極單調であり、彼らにとつて絢爛類ひなきものが、吾々にとつてこの上もなく簡單に思はれることもある。そもそもまた絶對者より見て、單純と複雜と、簡と繁とは何によつて分れるか。

それはそれとして私はこの頃よく神的な單調といふことを考へる。自然界を見るのに、人間の想像を絶した精巧複雜の生命の現象が認められると同時に、一方驚くばかりの單調の支配を看取し得る。これにたいする驚嘆を私は別の機會に表現したいと思ふのであるが、吾々はかの複雜にのみ心を奪はれることなく、この單調にふかい畏敬の念を捧げなければならない。）

黄金池を一巡して洪隱山の上部庭園にさしかかる登り口に一小門があつて、向上關と題した扁額が掲げられてゐる。山を登る通を向上の一路に擬したものであるが、それにしても多彩に見える下部の境地から上部の石庭の枯淡な世界へ通ずる路に向上の一關が設けられてゐるといふのは、吾々の問題にとつて象徴的な、興味ぶかいことであると思はれる。（昭和二十年七月初旬、洛西長岡の僑居に於て）

＊　苔寺にて

心字の池あり
池を繞りて小徑通じ
歩々に奇岩あり
また岩組みの妙へなる丘には
清水湧けり、龍淵の水と呼ぶ
松杉の常緑にまじる楓
地に敷けるとりどりの苔は
幾色と知らず紅紫の文を成す

秋なほ嵯峨野に早き夕ぐれを
訪ふ人もなき數寄屋に憩ひて
古への聖のすぐれし構想を思ひ
いみじき泉石のあしらひを愛づ
憂むべきかなこの林泉

またここにして想ふ、前の日訪れて
その含蓄の深さに心打たれし
虎の見渡しと呼ぶ枯山水
露はなる白砂の坪に
ただ十まりの石置きし
かの石庭のめでたさを

さはれ、かの簡淨と、この燦爛と
いづれなるやを問ふなかれ
かれと、これと
いづれか日本造庭の粹ならざる
われらいづれをも讃へ誇らむ
ともにわが藝術の傳統をつらぬく二條の流れに
咲きいでし美の精華なれば

＊＊＊　我國の畫論に氣韻尊重説を多く見ることは周ねく知られるとほりで、或は風神といひ、韻致とよび、寫生よりも寫意、形似よりも神似を尚ぶことは日本畫の傳統の主傾向である。しかしこの主張は繪畫理論としては南齊の謝赫が畫家六法の第一に置いた氣韻生動の説から出てゐて、特に日本的といふより、むしろ弘く東洋的な精神の現はれである。しかるに光起の畫論中『畫論秘訣』の條に「繪は質朴なるをよしとす……」といひ、「何にても十分に飛さず書くをきらふ。事少なにして意一ばいなるをよしとす……」といひ、「詩歌の心をかくともみな出すべからず、おもひ入れを含ますべし、白紙も模様の内なれば心にてふさぐべし……」といふごとき、質實を愛し、餘韻、餘情を重んじ、含蓄を尚ぶ日本畫獨自の精神の表現といふべく「異國(支那)の畫は文のごとく、本朝の畫は詩のごとし」といふ意味深い語を以て結んでゐる。吾國の畫論中で傑出する玉洲の論述及びその他の多くにも、冲澹、簡素の精神を强調してゐる。

＊＊＊　妙喜庵は近頃見學する機會を得たのであるが、限られた狹小の場所に造られて、よく茶室、茶庭の精神を遺憾なく

發揮してゐる手法は驚嘆に値する。

贈記。福岡から東京、東京から茅ケ崎、茅ケ崎から京都西郊の長岡へとこの二年間、私は轉々として居を移さなければならなかつた。その度び毎に身邊の書籍はその數を減じて寂寥を加へつゝあるが、この不自由の境遇も多くの人が身を以て兵火の巷から逃れてゐるのに比すれば物の數ではない。それにしても今回豐田さんが定年御退職の記念に本誌の特輯號を出すに當り、中山さんから一文を囑せられたとき、私はこの事情のために御斷りをしなければならなかつた。しかし私の退職の場合に豐田さんから受けた數々の恩誼を想うて、この記念の企てに參加し得ないことをいかにも不本意に考へ、思直してこの一篇を起草した。參考したい文獻も多々あつたが、目下借覽の便宜ある僅かのものゝみにとどめなくてはならなかつたし、落つかない生活のために十分に推敲することもできずに、散漫粗笨の感想文に終つたことは豐田さんにも申譯のないことである。諒恕をお願ひしたい。

なほこの一文の着想が私の退職記念號に書かれた高木さんの「牝丹芳」に何らかの連繫點のあることは兩者を併せ讀めば知られるであらう。こゝに附言して負ふところの示唆を明かにする。